

うたごえ運動における「うた」——1950年代初頭までの分析

河西秀哉

キーワード：うたごえ運動、民謡、社会運動、共産党

はじめに

近年、戦後文化運動に関する研究が盛んである。歴史学・文学・思想史・社会学など、様々な分野からアプローチされ、共同研究が展開されているのも特徴であろう。本稿では、そうした文化運動のうち、うたごえ運動を取りあげてみたい¹。

敗戦後、占領軍の指導によって、日本の「民主化」は急速に進展していった。そのなかで文化運動も大きな広がりを持って人々に浸透していった。一方、敗戦後に再建された日本共産党は職場における文化サークル組織の支持・強化を促進する方向性を打ち出している。それと前後して、マルクス主義者や自由主義的知識人も参加した民主主義文化団体が相次いで組織化された。そして、1946年2月27日には敗戦後に復興した新日本文学会・日本現代音楽協会（現音）などの民主主義文化団体を結集する形で、日本民主主義文化連盟（文連）が設立される²。

後にうたごえ運動の指導者となった関鑑子も現音や文連結成に参加し、音楽部門の指導を担当した。戦前にプロレタリア芸術運動へ参画して著名であった関鑑子は、1930年代の左翼勢力への弾圧のなかで次第に活躍の場を失っていたものの、敗戦後に「若者たちの打ちくだかれた姿に胸をうたれ」、「打ちひしがれた人びとに音楽をあげようと決心し」て自宅で歌の集いを行っていた³。同時期、共産党で文化芸術工作活動を展開していた蔵原惟人からも「いまこそ文化芸術がもとめられている時期であり、あなた自身を本当に生かせる時だ⁴と励まされ、関は積極的に文化活動に参画していく。

関はその後もメーデーなどの現場で音楽指導を担当するものの、労働組合が援助してサークルを作り、音楽の専門家が協力して音楽を教えるというスタイルでは大衆的な音楽活動に繋がらないと感じるようになった⁵。人々のより自発的・自立的な動きによって、音楽活動がなされていく必要性を痛感したのである。

同時期、共産党側でも文化工作の一環としてコーラス隊の結成が構想され

1 以下、特に注記がない場合は、河西秀哉『うたごえの戦後史』（人文書院、2016年、第三章）、同「一九五〇年代うたごえ運動論」（『大原社会問題研究所雑誌』第707・708号、2017年）を参照。

2 赤澤史朗「戦中・戦後文化論」（朝尾直弘ほか編『岩波講座日本通史 近代4』岩波書店、1995年、後に赤澤『戦中・戦後文化論』法律文化社、2020年所収、297-299ページ）、高岡裕之「敗戦直後の文化状況と文化運動」（『年報日本現代史』第2号、1996年、182-186ページ）。

3 青地晨「関鑑子伝」（『知性 増刊日本のうたごえ』1956年、133ページ）。

4 関忠亮「大河となる歌ごころを」（井上頼豊編『うたごえよ翼ひろげて』新日本出版社、1978年、179ページ）。

5 藤本洋「一人の心臓のときめきを万人の鼓動に」（井上前掲書28-29ページ）。

るようになる。そして都内各地から青年が集められ、1947年12月に青共中央コーラス隊が結成された。関はコーラス隊への指導の要請を受け、その指導にあたるようになる。コーラス隊は1948年2月10日には青共創立2周年記念集会に出演、団体名を青共中央合唱団と改称して正式に創立に至った。これがうたごえ運動のスタートである。このように、うたごえ運動の中心となった中央合唱団は共産党の文化工作の一環として組織され、関は指揮者として関わった。しかし関の活動は文連結成・メーデー参加という経過からもわかるように、共産党に限定されたものではなく、当該期の労働者や知識人など様々な人々とのかかわりのなかで展開されており、大きな広がりとも共有感を持つものであった。

その後、関の発案により「みんなうたう会」が始められ、職場の合唱団やうたごえサークルの基盤となっていく。また、大阪や名古屋などで中央合唱団の演奏会を開催し、関西合唱団や名古屋青年合唱団などの各地域の中心合唱団も結成されて、それらを中心としてうたごえ運動が全国的に広がりを見せていく。中央合唱団は名称を民主青年団中央合唱団に変更したり、1951年6月には民青からの独立が決定されて中央合唱団と改称したりするなど、共産党の運動からさらに拡大し、戦後の社会運動・文化運動のなかでも多くの人々が参加していく運動となっていく。

2000年代に入り、うたごえ運動に関しては、音楽学的な関心からの研究、歴史学・思想史のなかから具体的な団体・地域のうたごえ運動を取りあげて検討対象とする研究などが登場してきた⁶。一方で、これらの研究はその後の編纂物や回想を主な史料として用いている場合が多く、当該期の史料にあたってうたごえ運動とは何かを明らかにすることが課題となろう。また、具体的な団体・地域を取りあげる以外は、これまでの研究の検討対象が1950年代後半以降に重きが置かれている点も、うたごえ運動の初期の像をより明確にするという課題が残っていることを示している。近年、うたごえ運動に関する史料集が刊行された⁷こともあり、同時代の史料を分析して研究する必要性が高まっている。

そこで本稿は、うたごえ運動の出発時から1950年代初頭までの像を、当時の史料に基づいて明らかにしていきたい。本稿ではそこで歌われた「うた」に特に注目する。うたごえ運動では何が歌われ、そこにどのような主張が込められたのか。それによって、初期のうたごえ運動の様相をより具体的にしていきたい。

6

長木誠司「“運動(ムーヴマン)”としての戦後音楽史1945～」9-14(『レコード芸術』第53巻9号-第54巻2号、2004-2005年、後に長木「戦後の音楽」作品社、2010年に収録)、甬出頼之「うたごえ運動の歴史的展開」(『エリザベト音楽大学研究紀要』22号、2002年)、三輪泰史「紡績労働者の人間関係と社会意識」(『歴史学研究』833号、2007年、後に三輪泰史『日本労働運動史序説』校倉書房、2009年に所収)、水溜真由美「1950年代における炭鉱労働者のうたごえ運動」(『北海道大学文学研究紀要』126号、2008年)、岸伸子「王子争議をうたごえ運動とともに」(『女性史研究ほっかいどう』第3号、2008年)、武島良成「『竹田の子守歌』の文脈」(『部落問題研究』203号、2013年)、門奈奈由子「1950年代後半の『うたごえ運動』」(『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』第18号、2012年)、寺田真由美「うたごえ運動における民謡の意義」(『表現文化研究』第3巻第1号、2003年)、輪島裕介「三橋美智也とうたごえ運動」(細川周平編『民謡からみた世界音楽』ミネルヴァ書房、2012年)など。

7

道場親信・河西秀哉編『「うたごえ」運動資料集』全六巻(金沢文圃閣、2016-2017年)。

1 『うたごえ』の分析

本章ではまず、『うたごえの戦後史』でも検討したが、中央合唱団の機関誌であった『うたごえ』に収録された「うた」を分析したい⁸。『うたごえ』は1949年2月に第1号が創刊され、毎月2回発行、現在は1950年11月15日に発行された20号まで確認できる（合併号や演奏会プログラムを兼ねたものもあり）。うたごえ運動初期の状況がわかる史料と言える。おおよそA3用紙に表裏印刷され三つ折りにした号が多く、内容は活動の記録・歌われる曲の楽譜・うたごえ運動に関する意見、政治・社会に対するメッセージなどが記されている。うたごえ運動に参加する人々に対してその購読も呼びかけられており、全国の担い手に読まれたものと推測される。ここでは『うたごえ』に掲載されている楽譜を検討し、うたごえ運動ではどのような「うた」が歌われたのかを見ることで、初期の運動の状況や思想の解明を行いたい。

表は『うたごえ』に掲載されている楽譜をまとめたものである。20号で71曲（ただし、表24・44番の《青年よ団結せよ》は2回掲載されているので、全部で70曲）が掲載されている。一見してわかるように、「民謡」が20曲と多い。その中で、日本民謡7曲とロシア民謡6曲が多く、ドイツ民謡3曲、アメリカ・スコットランド・ハンガリー・フランス民謡各1曲と続いている。

このうちロシア民謡は、戦前の日本において、人々の歌のレパートリーとして数多く取りあげられていた。また敗戦後、ロシアの音楽に触れたシベリア抑留者の帰還があり、抑留されている間にソヴィエト共産党に傾倒した音楽家たちもいた。彼らの帰国が、ロシア民謡のうたごえ運動へのレパートリー化に寄与した⁹。うたごえ運動の担い手たちによる社会主義・共産主義への傾倒も、ロシア音楽やロシア民謡へのあこがれやそれを嗜好する傾向へと進ませた。こうして、ロシア民謡はうたごえ運動の重要なレパートリーとなった。ソヴィエトからの帰国者たちの集団「楽団カチューシャ」や関鑑子・中央合唱団も積極的に訳詞を行い（表31・34・48・60番など）、ロシア民謡の日本への定着が図られ、うたごえ運動のレパートリーとなった。また、ここでロシア民謡と表記されていないソヴィエト時代に作られた歌曲・流行歌も、日本ではロシア民謡と認識されているケースが多く、うたごえ運動のなかではロシア民謡がレパートリーの大きな柱であったことがわかる。

また、日本民謡がうたごえ運動で歌われるようになったのは、共産党の影響があった。共産党は1948年3月、自らの文化工作を「日本民族文化の独立のための闘争」と位置づけた。共産党は民族の概念を用いることで、人々に一体性を持たせ、それによって革命へと向かうことを提起した¹⁰。民族をひとつの共同体として意識させるものこそ、民謡であった。民謡は共産党が思考する革命へと人々を参画させるツールとして用いられ、レパートリーとし

8

河西前掲『うたごえの戦後史』94-103ページ、『うたごえ』は道場・河西編『うたごえ』運動資料集』第二巻、325-378ページに収録。

9

長木前掲書95-96ページ。

10

長木前掲書92-93ページ。こうした共産党の民族概念については、小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉』（新曜社、2002年、第5章）などを参照のこと。

て加えられた。

そのためか、《八木節》(表2番)のように普通の日本民謡の歌詞とは異なる(歌詞タイトルは《メーデー八木節》と記されている)、政治性を帯びた・風刺を込めた民謡も掲載されている。これは《八木節》のメロディーに、戦前から共産党に入党していた詩人で、敗戦後は党の中央委員を務め、共産党の文化運動をリードした人物の一人である、ぬやまひろしの詩が付された。そこには、「うた」に政治的主張を重ねられていた。同じように《ソーラン節》(表3番)も「赤旗」という言葉が用いられて共産党を想起させる歌詞が付されており、日本民謡にこうした政治性を帯びた歌詞を付けて歌うことは、うたごえ運動の特徴の一つであった。

ただし、日本民謡はこうした政治的思考だけでレパートリーに加えられたわけではなかった。「うた」にそれまで親しみのなかった人々を惹きつける手段として、うたごえ運動では民謡が歌われた。中央合唱団の第1期生であった奈良恒子の次の回想からはその状況がよくわかる¹¹。奈良は中央合唱団の公演宣伝のために小郡の国鉄の現場を訪ねた。そこは労働者が昼ご飯を食べている食堂で、奈良があいさつしても「男の人ばかりで、わたしがあいさつしてもチラッとこちらを向いただけで、夢中で食事をしているよう」だった。その時、奈良は「そうだ、と思いついたのが民謡です。労働歌や革命歌は知らなくても、民謡なら誰だって聞いたことがある」と考えた。そして奈良は《木曾節》を歌い出す。「唄といっしょに踊りも簡単ですが知っていました」と、振りを付けて《木曾節》を歌ったところ、それまで奈良を見ていなかった労働者たちが注目したという。このように、音楽に触れることが少なかった労働者に対し、「うた」に興味を持ってもらうために奈良は日本民謡を歌った。日本民謡がレパートリーに加えられたのは、「うた」にはそれまで興味の無かった初心者が参加しやすい環境を用意する目的があった。

ところで、奈良が振りを付けて歌ったと述べるように、うたごえ運動では日本民謡を振りを付けて歌うことが多かった。うたごえ運動における民謡は、直立不動で歌われるものではなく、身体性をともなったものであった。それは、民謡がそもそもそのような意味を持ちながら世間で歌われていたからであろう。うたごえ運動において民謡を歌うことは芸術性を追求することではなく、自身に極めて身近な生活の実感などをみんなで共有するためだった。そして、その生活という側面をより意識化するために動作をともなって日本民謡を歌ったのだろう。このように、日本民謡を生活に根ざした、明るくたくましい生産の「うた」としてうたごえ運動では捉え、人々に密着した労働歌としてレパートリーに加えたのである。

うたごえ運動の譜面では、五線譜の他に数字や下線などが付されているものもある。これは、数字譜と呼ばれるものであるが、五線譜が読めない初心

11
奈良恒子『うたごえに生きて』(東銀座出版社、2007年、33-36ページ)。

者への配慮であった。1はド、2はレ…と続く(0は休符)。数字に下線の無いものは4分音符、1本線は8分音符、2本線は16分音符になる。数字の横に点が付いているものは付点音符となる。『うたごえ』に掲載された楽譜のほとんどにこの数字と下線が付けられており、五線譜の読めない初心者にもそれらを使いながら歌えるように工夫がなされていた。

また、編成についても見てみると、明らかに斉唱が多い。これも初心者に向けた曲をうたごえ運動ではレパートリーとしていると考えることができる。つまり、一つのメロディーを全員で合わせて歌うことに主眼が置かれていた。パートを多くして和音を複雑化することでの、初心者の拒否感を和らげようとしていたのである。一方で、合唱のハーモニーを体験させようとする配慮も見られる。表36番の《美しい祖国のために》は、曲のほとんどが斉唱で最後になって4和音が登場する。つまり、一つのメロディーをみんなで歌い、最後にハーモニーを体感させる曲の構造となっている。このように、編成で声部が分かれている「うた」も最初から分かれているわけではなく、途中で声部が分かれる(最後の数小節のものが多く)構造の曲がいくつか見られる。これは、初心者に歌いやすいように、しかもハーモニーの魅力を感じさせるような「うた」に編曲し、それをうたごえ運動ではレパートリーにしたと見ることができるだろう。

最後に、民謡以外の曲についても触れておきたい。第一に、ソヴィエトや中国などの革命歌が散見されることである(例えば5・7番など)。こうした「うた」がレパートリーになっている背景には、政治性を帯びた意図がうたごえ運動にはあったからであろう。第二に、作曲者のなかに《美しい祖国のために》を作曲した関忠亮の名が目立つことである(19・35・36・45・52・70番)。関忠亮は関鑑子の弟で、うたごえ運動の指導者として活躍していた。うたごえ運動はその後、積極的に新しい「うた」を創作し歌っていくが、そこにはひとりひとりが新しく共同して「作る」という行為を通じて、結束力を高めて広まっていくという効果が期待されていた¹²。そして初期も、関忠亮を中心に創作曲が歌われていたのである。

12

長木前掲書99-101ページ。

2 『青年歌集』などから

次に、うたごえ運動のなかで編集されて1949年4月に出版された『青年歌集』¹³を検討し、そこに収録された曲を見ていくことで、その「うた」の特徴を明らかにしていきたい。『青年歌集』はうたごえ運動の参加者に広く配布されており、彼らはこの歌集を見て、そこに収録された「うた」を自らの合唱団のレパートリーとしていった。

13

道場・河西編『「うたごえ」運動資料集』第四巻、7-142ページに収録。

『青年歌集』にはまず冒頭に、《インターナショナル》が掲載されている。この「うた」は1871年のパリ・コムン直後に生まれ、社会主義・共産主義運動の象徴的な「うた」として世界に広がった。ソヴィエトにおいては1917年の十月革命後、第二次世界大戦中の1944年まで国歌になっていた曲である。日本でも戦前のプロレタリア音楽運動などで盛んに歌われ、敗戦後に関鑑子がメーデーで指揮をした「うた」でもあった。『青年歌集』の最初に掲載されているのは、それがうたごえ運動でも重要視されていたことを示唆している。『青年歌集』にはその他にも、社会主義・共産主義に関する「うた」がいくつも掲載されている。うたごえ運動は共産党から出発した運動ゆえ、それに関係する「うた」がそのレパートリーの大きな柱になっていた政治性との関わりをもって「うた」が歌われていたと言えるだろう。

もともとが1789年のフランス革命の際の革命歌で、その後にフランス国歌ともなっていた《ラ・マルセイエーズ》も『青年歌集』には掲載されている。しかしこれは、単にフランス国歌を日本語訳したものではなかった。1875年に社会思想家であったピョートル・ラブロフが、《ラ・マルセイエーズ》のメロディーに社会主義的かつラディカルなロシア語の歌詞を付けた《労働者のラ・マルセイエーズ》を日本語訳したものが『青年歌集』には掲載された。これはロシアの革命歌となり、ソヴィエトが建国されてから1918年まで国歌となっていた「うた」であった。つまり、やはり社会主義・共産主義に関する曲であったと言える。たしかに楽譜には「フランス国歌」と記載されているものの、その歌詞は次に掲げるように過激であり、社会主義・共産主義を称えるものになっていた（一番のみ引用）。

我等は燃ゆる焰／圧制を砕く鎚
自由は我が旗印／我が聖なるスローガン
戦にひるむ者／労働のぬすむ者に
戦い決する為 隊伍をつめよ／待てるは勝利か死か
とれ！ 武器を たて！ 鎖を／進め進めいざ進め／旗を進めよ

フランス革命の際の革命歌でも、封建的な王制を打倒する人々の声を象徴する「うた」であろう。しかし、メロディーがよく知られた《ラ・マルセイエーズ》をそのまま掲載するのではなく、あえて社会主義・共産主義に合わせた歌詞で掲載したところに、『青年歌集』の編集意図が示されている。しかも、この「うた」のタイトルは《コンミュニストのマルセーズ》となっており、コンミュニスト（共産主義者）とわざわざ表記されていた。なお、作詩者は関鑑子の夫であった小野宮吉で、彼は1932年に共産黨員として治安維持法により検挙され、肺結核によって釈放されるものの1936年には死去していた。つまり戦前の共産党への弾圧を象徴する人物の一人でもあり、うたごえ運動の

指導者である関とも関係する彼の詩が掲載されることの意味は大きかったのではないだろうか。

『青年歌集』にはこのほかにも、『ワルシャワ労働者の歌』『われらの仲間』などの各国の労働歌・革命歌が掲載され、社会主義・共産主義を称賛する「うた」が並んだ。また、ぬやまひろしや小林多喜二などの詩に曲が付された『俺たちは歌うことを知っている』『屍を(多喜二の歌)』なども収録された。そして、ぬやまの詩に関忠亮が作曲した『若者よ』なども掲載されているが、これはうたごえ運動のなかで作られた「うた」のなかでも特に著名で、広く歌われていくことになる。

このほかにも『ポールシュカ』(ロシア民謡)、『オーソレミオ』(ナポリ民謡)、『アリアン』(朝鮮民謡)などの各国民謡が『青年歌集』には数多く掲載されているが、これも前述した『うたごえ』と同じ傾向と言える。よく知られたメロディーの「うた」によって、それまで歌ったことのない人々のハードルを下げる意図もあったのだろう。また、各国の普通の人々の「うた」を歌うことで、その思いを理解するという考えもあったと思われる。そして、『木曾節』などの日本民謡も掲載された(これは政治的主張を絡めた歌詞ではなく、普通に歌われていた歌詞)。わらべうたの『ずいずいずっころばし』も「日本民謡」として紹介されて掲載されており、このように人々になじみある「うた」を掲載することで、運動の裾野を広げる意図があったと思われる。

こうした意図は日本民謡に限らず、アメリカの作曲家のフォスターの『ケンタッキーの我が家』『オ!スザンナ』『オールドブラックジョー』『スワニー河の歌』などが『青年歌集』に収録されている点も注目される。なじみのあるメロディーの「うた」を掲載することで、政治性だけではなく人々に「うた」を歌うことへの親しみを根付かせようとする意図があったのではないだろうか。また、モーツァルト作曲の曲も『美わし五月』や『あげよ盃よ』などが掲載されている点は、作曲家として著名なモーツァルトに触れることで音楽史の知識も触れさせようとする意図が込められていたものと思われる。

この『青年歌集』の意図はその後も引き継がれた。『青年歌集』出版と同じ年の1949年11月には『続青年歌集』が出版された¹⁴が、そこに収録された「うた」は『青年歌集』の系統とほぼ同様であった。

翌年4月に出版された『新青年歌集』はこうした傾向を引き継ぎつつ、新たな「うた」も掲載された。ロシアや中国などの革命歌・労働歌、世界各国の民謡、日本民謡、創作曲などがラインナップとして並び、やはりフォスターの曲がいくつも収録された。モーツァルトはなくなったものの、シューベルト作曲の『菩提樹』やウェルナー作曲の『野ばら』などが代わりに掲載された。このように西洋音楽の「うた」としてよく知られた曲もレパートリーとなっていたと思われる。ただし、それだけではない。土井晩翠作詩・滝廉太郎作曲

14

道場・河西編『「うたごえ」運動資料集』
第四巻、143-216ページに収録。

の《荒城の月》や島崎藤村作詩・大中寅二作曲の《椰子の実》など、明治期や昭和戦前期に作曲された日本の「うた」も収録された。くわえて、西条八十作詩・服部良一作曲の《青山脈》まで掲載されたのである。この時期の流行歌までもが『新青年歌集』に収録され、うたごえ運動のラインナップに加えられようとしていたことは注目に値する。これは、前述のように、共産党の文化運動からさらに拡大していく過程のなかで、より人々に「うた」を浸透させるための方策だったのではないだろうか。

3 何が歌われたのか？

以上のような「うた」が『うたごえ』や『青年歌集』などに収録されていたが、では実際にどのような「うた」がうたごえ運動の合唱団では歌われたのだろうか。

1949年7月31日に開催された中央合唱団の演奏会では、「歌は斗いと共に」と題されて、《カチューシャ》や《バルカンの星の下に》などのロシア民謡・歌曲が歌われたほか、《全世界民主青年歌》などの革命歌が歌われた¹⁵。このように、ソヴィエトに対する強い思いが選曲にも表れていると言えるだろう。うたごえ運動は当初の共産党の下にあった活動だったがゆえ、こうした選曲になったものと考えられる。

翌1950年3月12日には、中央合唱団は創立2周年の演奏会を「平和大音楽会」と題して開催した¹⁶。プログラムはまず、最初に「序曲」として全員で《平和を守れ》(木谷健一作詩、種市蔵一作曲)を歌うことからスタートする。《平和を守れ》はこの時期、反戦の歌として広く知られた「うた」であった¹⁷。おそらく観客を巻き込んだ形で歌える「うた」であったこと、戦争に反対する意思を強く示す「うた」であったことが、この曲がプログラムの最初に選択された理由なのではないだろうか。

その後、第一部は「世界の音楽」とタイトルが付けられ、アメリカ、中国、朝鮮半島、イタリア、日本、ドイツ、フランス、ハンガリー、ソヴィエトの「うた」が演奏された。そのなかには、各地の民謡だけではなく、プッチーニが作曲したオペラ「蝶々夫人」のアリア《ある晴れた日に》(独唱)やブラームス作曲の《ジプシーの歌》などのクラシックの世界ではよく知られた「うた」も演奏されている。西洋音楽の名曲とも言えるような「うた」を観客に提供することにも、意義があると見られたからだろう。もちろん日本民謡の《八木節》なども身体性をともなった踊りを付けて披露されており、これらの点は『うたごえ』や『青年歌集』の編集意図を引き継いでいる。

また、アメリカの「うた」では、黒人霊歌《奴隷の牧師》が歌われた。黒人

15
道場・河西編『「うたごえ」運動資料集』
第三巻、51ページ。

16
道場・河西編『「うたごえ」運動資料集』
第二巻、347ページ。

17
たとえば、《平和を守れ》は1951年の
京都大学天皇事件の時に、京都大学に
居合わせた人々が自然発生的に歌う
など、多くの人々が歌うことができる
「うた」であった(河西秀哉『天皇制と
民主主義の昭和史』人文書院、2018
年、97-98ページ)。

霊歌はアフリカからアメリカに強制的に奴隷として連れてこられた黒人の人々が、つらい労働のなかでキリスト教に目覚め、そして歌った「うた」である。美しいメロディーの「うた」が多く、その点でも観客の心を惹きつけやすい。それだけではなく、そうした境遇であった黒人たちの「うた」は、労働者としてのあり方や人間としての生き方を人々に示す意味から選曲されたのではないだろうか。

その後の第二部では、ソヴィエト民話を題材にロシアの作曲家であるプロコフィエフが作曲した混声大合唱《栄光》を土方與平と関鑑子の訳詞を付けて初演をした。プロコフィエフはクラシック作曲家でありつつ、社会主義的な思考をも取り入れた作風を主としており、これまで見てきたようなうたごえ運動で推奨された「うた」の結節点とも言える作曲家であった。この演奏会では最後に、再び《平和を守れ》と《青年を団結せよ》といった反戦の「うた」、運動を鼓舞する「うた」が歌われた。

以上の演奏会のプログラムからもわかるように、初期のうたごえ運動では、「うた」にそれまで親しみのなかった人にも障壁なく楽しんでもらえるようなわかりやすい「うた」、西洋音楽史において著名な作曲家によるクラシックの名曲とも言えるような「うた」、そして社会主義・共産主義を主張し人々を鼓舞するような「うた」が演奏されたのである。

おわりに

以上、うたごえ運動が始まってから1950年代初頭までの初期の段階で、どのような「うた」が機関誌や歌集などに掲載されて推奨され、演奏会で歌われたのかを確認してきた。

うたごえ運動は共産党の運動として始まったがゆえ、ソヴィエトや中国の革命歌も数多く歌われた。ロシア民謡は、戦前のプロレタリア芸術運動からの系譜で継続して歌われた「うた」でもあり、またソヴィエトへのあこがれからのものであった。日本民謡は「民族」性を強調する共産党の方針とも合致しつつ、人々になじみのある「うた」として、取りあげられた。

この人々になじみがあるという要素も、うたごえ運動の「うた」には大きな意味を持った。それまで歌っていなかった人々に障壁を感じさせることがないよう、聞いたことのあるメロディー、親しみやすいメロディーの「うた」が『青年歌集』には掲載された。アメリカの作曲家であるフォスターの曲はまさにその代表例であろう。各国の民謡もそうした意味があったものと思われる。また、教育的効果を持ったクラシックの作曲家による「うた」も推奨された。

こうした初期の方針はその後にも継続していく一方、うたごえ運動は新しい

「うた」の方向性をもその後、展開していくことになる。それが、参加者による「創作曲」というジャンルである。それについてはすでに別の機会に一部論じたことがある¹⁷が、さらなる検討を進めていきたい。

17
河西前掲『うたごえの戦後史』第三章、河西秀哉「うたごえ運動の一九六〇年代」（『年報日本現代史』第26号、2021年）。

表 「うたごえ」所収の曲リスト

番号	曲名	作詩	作曲	訳詞・編曲など	編成	備考	掲載号
1	バイカル湖のほとり		ロシア民謡	ぬやまひろし(訳詞)、井上頼豊(編曲)	4部		1号
2	八木節	ぬやまひろし	日本民謡		斉唱	歌詞には「メーデー八木節」と表記	1号
3	ソーラン節	ソ同盟帰還者	日本民謡	民青团北海道地方委員会文化部(採譜)	斉唱		1号
4	おおしくすゝめ	タクラテル	ハラタロウ		斉唱		1号
5	平和擁護の歌	イフレンケル	ヴェビエロイ	ソ同盟帰還者(訳詞)	2部	中国革命歌	2号
6	保衛黄河	光未然	洗星海	坂井トクゾウ・テル(訳詞)	輪唱	「黄河大合唱」という7曲のうち1曲	2号
7	われら民主青年	希陽	馬可	坂井トクゾウ・テル(訳詞)	斉唱	中国革命歌	2号
8	義勇軍行進曲	聶耳	聶耳	坂井トクゾウ・テル(訳詞)、関鑑子(編詩)	斉唱	中華人民共和国国歌	2号
9	五つの花				斉唱	中国共産党開放区で愛唱されていた歌	2号
10	小麦色の娘	シベトフ	ノビコフ	関鑑子(訳編)	3部	ドイツ軍と戦うパルチザンをたたえる歌	3号
11	野こえ山こえ	エフ・アリモフ	アトウロフ	中央合唱団(訳・編詩)	2部	アムール川地域のパルチザンをたたえる歌	3号
12	誰が知ろうか	エム・イサコフスキー	ヴ・サハロフ	中央合唱団(訳・編詩)	3部	独ソ戦前のコルホーズ若者を歌った歌	3号
13	誓の石	ア・ザロフ	ベ・モク로우ソフ	中央合唱団(訳・編詩)	斉唱	4番までのうち訳詞は1番のみ	3号
14	ソ同盟国歌	セルゲイ・ミハルコフ、エリ・レギスタン	アヴェ・アレクサンドロフ		2部	日本語・ロシア語併記	3号
15	金は天下のまわりもの		人形劇団ブーク(提供)		斉唱		4号
16	航路	ア・チュールキン	ヴォ・セドイ	関鑑子(訳編)	3部		4号
17	木曾節		日本民謡		斉唱		4号
18	氷滑		ドイツ民謡		斉唱	日本語	5号
19	冬の日	ぬやまひろし	関忠亮		斉唱		5号
20	詩神の子		シューベルト	高橋信夫(訳詞)	斉唱		5号
21	燃えろベチカ		ロシア民謡	緒園涼子[作詩とあるが訳詞か]、佐々木幸徳(編曲)	2部		5号
22	みかんばたけ	ぬやまひろし	原太郎		斉唱		5号

番号	曲名	作詩	作曲	訳詞・編曲など	編成	備考	掲載号
23	平和を守れ	木谷健一	種市蔵一		3部	戦後の大学生によく歌われた曲	6・7・8 合併号
24	青年よ団結せよ	[P.ゲルマン]	クルチーニン		斉唱	日本語、学生運動で歌われた曲、プラーグ国際青年祭コンクール入選作	6・7・8 合併号
25	道		ソヴェト歌曲	岡田和夫(訳詞)	4部		6・7・8 合併号
26	カリンカ		[ロシア民謡]		2部	日本語	6・7・8 合併号
27	灯(ともしび)		トム・ブランテール		斉唱	ブランテールはソビエトの作曲家、日本語	6・7・8 合併号
28	シベリア大地の歌		エヌ・クリュコフ		2部	映画「シベリア物語」の主題歌、日本語	6・7・8 合併号
29	防人の歌	[九州地方農民]	九州地方民謡		斉唱	秀吉の朝鮮征伐時に農民が詠んだもの	6・7・8 合併号
30	人足の歌	舟方一	清宮正光		2部	詩集『我が愛は斗の中から』より	6・7・8 合併号
31	うるわし春の花よ	[スルコーワ]	ベ・モクロウソフ	[劇団カチューシャ訳詞]	斉唱		9号
32	汝が友		ハンガリー民謡		3部	日本語	9号
33	あわて床屋	[北原白秋]	山田耕筈		斉唱		9号
34	風よ歌え	[レベシェフークマチ]	イ・ドゥナエフスキー	[劇団カチューシャ訳詞]	斉唱		10号
35	(新メーデー歌) 晴れた五月の	江森盛弥	関忠亮		斉唱		10号
36	(平和讃歌) 美しい祖国のために	岩上順一	関忠亮		4部	ほとんど斉唱、最後から2小節目が2部、最後の小節が4部	10号
37	世界をつなげ花の輪に	篠崎正	箕作秋吉		4部		10号
38	たのしくうたえば		ドイツ民謡		斉唱	日本語	11号
39	五月のモスクワ	[V・レベジェフ＝クマチ]	[ボクラス兄弟]		2部	スターリン時代に作詩作曲されたモスクワ賛歌、日本語	11号
40	王様のマーチ		フランス民謡	二條啓輔(訳詞)	4部		11号
41	ラ・マルセーズ	[ルージェ・ド・リール]	[ルージェ・ド・リール]		4部	フランス国歌・革命歌、日本語	11号
42	全世界民主青年のうた	[L.オシャーニン]	[A.ノヴィコフ]	[関鑑子訳詞]	斉唱	第1回世界青年学生平和友好祭典コンクール作曲部門1位	12号
43	親衛隊のうた		ソビエト青年共産同盟歌	鹿地亘〔作詩とあるが訳詞か〕	斉唱	日本語	12号
44	青年よ団結せよ	[P.ゲルマン]	クルチーニン		斉唱	日本語	12号
45	若者よ	ぬやまひろし	関忠亮		4部		12号
46	人民抗争歌				斉唱	朝鮮半島歌、楽譜にはハングルカタカナ書き、日本語詩もあり	13号
47	憎しみのつば	[E.ラージン]	[E.ラージン]	[鹿地亘訳詞]	4部	1897年モスクワの牢獄で作曲	13号

番号	曲名	作詩	作曲	訳詞・編曲など	編成	備考	掲載号
48	ぐみの木		[ロシア民謡]	[劇団カチューシャ 訳詞]	2部		13号
49	国際学生連盟の歌	レ・オシアニン	ヴェ・ムラデリ		斉唱	国際学生連盟は1946年8月 にプラハで設立、日本語	14号
50	動物園	深尾須磨子	ハイドン	橋本国彦(編曲)	4部	交響曲第94番「驚愕」より	14号
51	麦畑で	[ロバート・バーン ズ]	スコットランド民謡		3部	日本語	14号
52	東京急行青年行動隊の 歌	[東京急行青年 行動隊]	関忠亮		4部		14号
53	秩父民謡		日本民謡		斉唱		15号
54	自由の歌		[ドイツ民謡]	[夏目利江訳詞]	4部		15号
55	狩人の合唱	桑田つねし	ウェーバー		2部	歌劇魔弾の射手第3幕より、 日本語	15号
56	舟のりの唄	[メチェフィナ]	[ロシア民謡]	[中央合唱団訳詞]	2部		15号
57	きらめく星				4部	日本語	16号
58	たたら節		埼玉民謡		斉唱		16号
59	全世界学生行進曲	[グリヤーナ]	A.ノヴィコフ	関鑑子(訳詞)	斉唱		16号
60	祖国	[R・クマチ]	[ドナエフスキー]	[楽団カチューシャ 訳詞]	2部		16号
61	楽し歌声				2部	日本語	17号
62	同志をたゝえる歌		アメリカ労働歌		2部	日本語	17号
63	仕事の歌(若者よ)		ロシア民謡	[津川圭一訳詞]	2部		17号
64	夕張娘	ぬやまひろし	大木正夫		斉唱		18号
65	平和の声		西山龍介		2部		18号
66	ついついづっころばし		日本民謡	橋本国彦(編曲)	4部		19号
67	カチューシャの唄	エム・イサコフス キー	エム・フランテル	関鑑子(編訳詞)	2部	ロシア民謡	19号
68	建設人民的華北	駱文莎■	程雲莎萊	サカイ・トクゾー (訳詞)	輪唱	中国共産党軍が北京入場 の際に歌った歌	19号
69	懐しのヴァージニア		アメリカ民謡		4部	英語、日本語併記	20号
70	かぞえ唄	佐々木孝丸	関忠亮		4部		20号
71	国の隅々から		ジェルジンスキー	関鑑子(訳詞)	2部	オペラ「静かなるドン」 終幕コーラス	20号

作詩・作曲者名などは「うたごえ」に掲載されているとおりに表記した。

「うたごえ」に掲載されていないが、追記したものは〔 〕を付した。

追記にあたっては「うたごえサークル『おけら』」のHP (<http://bunbun.booo.jp/index.htm>) が大変参考となった。